

# 薬草取

泉鏡花

青空文庫



日光掩蔽

地上清涼

靄靄垂布

如

可承攬

其雨普等

四方俱下

流樹無量

率土充

洽

山川險谷

幽邃所生

卉木藥艸

大

小諸樹

「もし憚ながらお布施申しませう。」

背後から呼ぶ優しい声に、医王山の半腹、樹木の鬱葱たる

中を出でて、ふと夜の明けたように、空澄み、氣清く、時しも夏の初を、秋見る昼の月の如く、前途遙なる高峰の上に日輪を仰いだ高坂は、愕然として振り返った。

人の声を聞き、姿を見ようとは、夢にも思わぬまで、遠く里を離れて、はや山深く入っていたのに、呼懸けたのは女であった。けれども、高坂は一見して、直に何ら害心のない者であることを認め得た。

女は片手拝みに、白い指尖を唇にあてて、俯向いて経を聞きつつ、布施をしようというのであるから、

「否、私は出家じゃありません。」

と事もなげに辞退しながら、立停つて、女のその雪のような

耳許みみもとから、下しもぶく膨れの頬ほおに掛かけて、柔やわらかに、濃あさぎい浅葱ひもの紐をを結んだのが、露つゆの朝顔の色をを宿やどして、加賀かががさ笠という、縁ふちの深いので眉まゆを隠かした、背にはは花籠はなかご、脚あしに脚絆きやはん、身に軽いでたに扮装つたが、艶あでや

麗かな姿をを眺めた。  
 かなたは笠の下から見透みすかすが如くにして、

「これは失礼なことを申しました。お姿は些ちつともそうらしくはございませんが、結構な御経おきようをお読みなさいますから、私わたくしは、あの、御出家ではございませんが、御修行ごしゆぎようじや者でいらつしやい  
 ましようと存じまして。」

背広の服で、足あしごしら拵えして、帽ぼうを真深まぶかに、風呂敷ふろしき包づつみを小ささいぎようじよいく西行さいぎ背負ようじというのにしている。彼は名を光行みつゆきとて、医科

大学の学生である。

時に、みようほうれんげきようやくそうゆほん妙法蓮華經藥草論品、だいごげなかば第五偈の半を開いたのを左

たなそこさきの掌に捧げていたが、めて右手に支いた力杖ステッキを小脇かいあに搔上げ、

「そりやまあ、修行者は修行者だが、まだまるでしろうと全然素人で、どうして御布施ごふせを戴くようなものじゃない。

よみかた読方だつて、何だ、たいがい大概、だいがくしゆきしやうく大学朱熹章句で行くんだか

とうとら、尊い御経おきようを勿体もつたいないが、この山には薬の草が多いから、

気の所せい為いか知らん。ふもと麓からこうやつて一里ばかりも来たかと思う

と、風も清すがすが々しい薬の香かがして、何となく身に染しむから、心しんが

願んがあつて近頃から読み覚えたのを、とな誦えながら歩ある行いている

んだ。」

かく打明けるのが、この際自他のためと思つたから、高坂は親しく先ず語つて、さて、

「姉さん、お前さんは麓の村にでも住んでいる人なんか。」

「はい、二俣村でございます。」

「あああの、越中の蛸波へ通う街道で、此処に来る道の岐れる、目まぐるしいほど馬の通る、彼処だね。」

「さようでございます。もう路が悪うございまして、車が通りませんものですから、炭でも薪でも、残らず馬に付けて出しますのでございます。」

それに丁どこの御山の石の門のようになっております、戸室口から石を切出しますのを、皆馬で運びますから、一人で五疋

も曳ひきますのでございますよ。」

「それではその麓から来たんだね、唯たった一人。……」

静しずかに歩ほを移かしていた高坂は、更にまた女の顔を見た。

「はい、一人でございます、そしてこちらへ参りますまで、お姿を見ましたのは、貴方あなたばかりでございますよ。」

いかにもという面おも色もちして、

「私わたしもやつぱり、そうさ、半里ばかりも後あとだった、途中で年寄つた樵夫きこりに逢あつて、路みちを聞いた外ほかにはお前まへさんきり。

どうして往いつて還かえるまで、人ひとツ子こ一人ひとりいようとは思おもわなかつた

。

この辺あた唯ただなだらかな蒼海原あおうなばら、沖へ出たような一面の草みまわをし



ながら、

「や、ものを言つても一つ一つこだまに響くぞ、寂さびしい処ところへ、能よくお前まへさん一人ひとりで来たね。」

女おんなは乳ちの上うへへ右みぎ左ひだり、幅ひろ広く引掛ひっかけた桃色ももいろの紐ひもに両手りょうてを挟はさんで、花はな籃かごを揺ゆり直なおし、

「貴方あなた、その樵夫きこりの衆しゅうにお尋たずねなすつて可ようございました。そんなけわに峻つたしい坂さかではございませぬが、些ちつとも人ひとが通かよいませぬから、誠まことに知れにくいのでございませぬ。」

「この奥おくの知れない山やまの中なかへ入いるのに、目標めじるしがああの石いしばかりじや分わらんではないかね。」

それも、南みなみ北きた、何方どちらか医王山いおうざん道みちとでも鑿ほりつけてあれば

まだしもだけれど、唯河原ただに転ころがっている、ごろた石の大きいよう  
 な、その背後うしろから草の下に細い道があるんだもの、ちよいと間違  
 えようものなら、半年経歴へめくつても頂いたには行ゆかれないと、樵夫きこりも言  
 ったんだが、全体何だつて、そんなに秘かくして置く山だろう。全く  
 あの石の裏ほかより外どこに、何処も路はないのだろうか。「  
 「ごごいませんとも、この路みち筋すじさえ御存じで在いらつしやれば、  
 世を離れました寂しさばかりで、獸けだものも可おそろしい恐おそろしいのはおりませんが、  
 一足でも間違えて御覧なさいまし、何千丈じようとも知れぬ谷で、行ゆき  
 留まりになりますやら、断崖きりぎしに突つき当あたりますやら、流ながれに岩が飛  
 びましたり、大木の倒れたので行く前ゆが塞さきつたり、その間には草く  
 樹さきの多いほど、毒虫もむらむらして、どんなに難儀でございまし

よう。

旧もとへ帰るか、俱利伽羅峠くりからとうげへ出抜でぬけますれば、無事に何方どちらか国へ帰られます。それでなくつて、無理に先へ参りますと、終局しまいには草くさひとすじ一条も生えませんが、焼山やけやまになつて、餓死うえじにをするそうでございます。

本あなた当に貴方がおつしやいます通り、樵夫きこりがお教え申しました石は、飛驒ひだまでも末広すえひろがりの、医王の要かなめいし石と申しまして、一度踏外ふみはずしますと、それこそ路がばらばらになつてしまいますよ。

名だたる北ほくこく国秘密の山、さもこそと思つたけれども、

「しかし一体、医王というほど、此処ここで薬草が採れるのに、何故なぜ

世間とは隔へつて、行ゆき通かよがないのだらう。」

「それは、あの承うけたまわりますと、昔から御領主の御禁山おとめやまで、滅多めつたに人をお入れなさらなかった所せ為いなんでございますつて。御領主ばかりでもござんせん。結構な御薬おくすりの採れます場所は、また御守護かみがみの神々ほとけさま 仏様ではいりも、出入とをお止め遊ばすのでございませうと存じます。」

譬たとえば 仙せんきよう境いれいに異霊ほしいままあつて、恣すくなに人の薬草を採る事を許さずというが如く聞えたので、これが少すくなからず心に懸かかつた。

「それでは何か、私わたしなんぞが入はいつて行いつて、欲ほしい草を取とつて帰かえつては悪いのか。」

と高坂はやや気色けしきばんだが、悚然ぞつと肌寒はださむくなつて、思おもわず口

の裡うちで、

慧えうん雲がん含じゆん潤じゆん

電でん光こう晃こう耀よう

雷らい声じやう遠おん震しん

令れ

衆いじ悦ゆえ予つよ

日に光つこう掩おん蔽ぺい

地ち上じやう清しやう涼りやう

鬣あ鬣い垂たい布すいぶ

如に

可よ承かし攬しやうらん

二

「否い、山いさえお暴あらしなさいませねば、誰ど方なたがおいでなさいまして

も、大事ないそうでございませぬ。薬いの草くさもあります上かみは、毒どくな草くさもないこといはございません。無む暗やみな者ものが採とりますと、どんな間ま間まちが

違ちがいなるうも知れませんか、昔むかしから禁きん札さつが打うつてあるので

ございましょう。

貴あなた方は、そうして御おき経ようをお読よみ遊あそびすくらい、縦た令とお山いで日

が暮くれても些ちつともお氣き遣づな事はきございますまいと存ぞんじます。」

言いいかけてまた近ちかづき、

「ああのささようなら、貴あなた方はお薬くすりになる草くさを採とりにおいいでななさるの

ででござんすすかい。」

「少しょう々しょう無む理りな願ねがいですがね、身み内うちに病び人にんがああつて、ととても医い者しや

の薬くすりでは治ならんらんに極きままつたたですから、この医い王わう山さんでなくくつて外ほかにな

い、私わたしが心こころ当あたりの薬くすり草くさを採とりに来きたんだが、何なに、姉ねえさんさんは見み懸か

けた処ところ、花はなでも摘とみに上あがるるんですか。」

「御覽とおりの通、花を売りますものでござんす。二日置き、三日置おきに

参つて、お山の花を頂いては、里へ持つて出て商あきないます、丁ちようど唯た

だいま いろいろ はなざかり  
今が種いんげい々な花盛はなざかり。

千蛇せんじやが池いけと申しまして、頂いただきに海うみのような大おおきな池いけがございます。

そしてこの山やま路みちは何ど処こにも清水しみずなぞ流ながれてはおりません。その

代暑かわりい時とき、咽喉のどが渴かわきますと、蒼あおい小ちいな花はなの咲ひかきます、日ひ蔭かげの草

を取とつて、葉はの汁つゆを嚙かみますと、それはもう、冷つめい水みづを一い斗とばか

りも飲のみましたように寒さむうなります。それがないと凌しのげませんほ

ど、水みづの少すくい処ところですから、菖蒲あやめ、杜かき若つばた、河骨こうほねはござんせん

が、躑躅つづじも山やま吹ぶき、ああの、牡丹ぼたんも芍薬しやくやくも、菊きくの花はなも、桔ききよ

梗うも、女お郎み花なえしでも、皆みな一いっ所しょに開ひらいていますよ、この六月ろくがつか

ら八月の末時分まで。その牡丹だの、芍薬だの、結構な花が取れますから、たんとお鳥ちようもく目が頂けます。まあ、どんなに綺麗きれいでございましょう。

そして貴方あなた、お望のぞみの草をお採り遊ばすお心こころあたり当あたりはどの辺でござんすえ。」

と笠かさながら差覗さしのぞくようにして親しく聞く、時に清すずしい目がちらりと見えた。

高坂は何となく、物語の中なる人を、幽境ゆうきようの仙家せんかに導く牧童ぼどうなどに逢う思いがしたので、言ことも自おのから慇懃いんぎんに、

「私も其処そこへ行くつもりです。四季の花の一時いつときに咲く、何という処ところでしょうな。」



「はい、美女びじよケ原はらと申します。」

「びじよがはら？」

「あの、美しい女と書きますつて。」

女うつむは俯向うつむいて羞はじたる色あり、物つつまの淑つつましげに微笑ほほえむ様子。

可なつかし懐なつかしさに振ふりかえ返かえると、

「あれ。」と袖そでを斜ななめに、袂たもとを取とつて打うちかたむ傾むき、

「あれ、まあ、御覽ごらんなさいまし。」

その草くさ染ぞめの左の袖そでに、はらはらと五片いつひらみひるれない三片さんぺん紅こうを点ちじたのは、

山鳥やまどりの抜羽ぬけはか、非あらず、蝶ちようか、非あらず、蜘蛛くもか、非あらず、桜さくらの花はなの零こぼ

れたのである。

「どうぞございましょう、この二、三ヶ月の間は、何処どこからとも

なく、こうして、ちらちらちら絶えず散つて参ります。それでも何処どこに桜があるか分りません。美女ヶ原へ行きますと、十里みなみのとの能登の岬みさき、七里北きたに越え中立山ちゅうたてやま、背後うしろに加賀かがが見晴せまして、もうこの節せつは、霞かすみも霧もかかりませんのに、見紛みまごうようなそれらしい花の梢こずえもござんせぬが、大方おおかたこの花片はなひらは、煩うるさい町方まちかたから逃げて来て、遊んでいるのでございましょう。それともあつちこつち山の中を何かの御使おつかいに歩いているのかも知れません。「

と女が高く仰あおぐに連つれ、高坂むぐらも葎むぐらの中に伸のび上あがつた。草の緑あがが深さかくなつて、倒さかさまに雲うつに映うつるか、水底みなそこのような天てんの色いろ、神靈秘しんれいひみ密つの氣きを籠こめて、薄うすむらさき紫むらさきと見るばかり。

「その美女ヶ原までどのくらいあるね、日の暮れない中行うちゆかれる  
でしようか。」

「否いいえ、こう桜が散つて参りますから、直じきでございませう。私も其そこ処  
まで、お供いたしましたますが、今日こそ貴方あなたのようなお連つれがございま  
すけれど、平時いつもは一人で参りますから、日一杯ひいっぱいに里まで帰るの  
でございませう。」

「日一杯？」と思ひも寄らぬ状さま。

「どんなにまた遠い処ところのように、樵夫きこりがお教え申したのでござん  
すえ。」

「何、樵夫に聞くまでもないです。私に心こころ覚おぼえが丁ちやんとある。先  
ず凡およそ山の中を二日も三日も歩行あるかなければならないですな。

もつとのほ  
 尤も上りは大抵どのくらいと、そりや予て聞いてはいるんで  
 すが、日一杯だのもう直だの、そんなに輒く行かれる処とは思わ  
 ない。

御覧なさい、こうやって、五体の満足なはいうまでもない、谷  
 へも落ちなけりや、巖にも躓かず、衣物に綻が切れようじやなし、  
 生爪一つ剥しやしない。

支度はして来たつても餒い思いもせず、その蒼い花の咲く草を  
 捜さなけりやならんほど渴く思いをするでもなし、勿論この先

どんな難儀に逢おうも知れんが、それだつて、花を取りに里から  
 日帰をするという、姉さんと一所に行くんだ、急に日が暮れ  
 て闇になろうとも思われぬが、全くこれぎり、一足ずつ出

さえすりや、美女ヶ原になりますか。」

「ええ、訳わけはございません、貴方あなた、そんなに可おそろしいところ恐おそろしいところ処ところと御存じ

で、その上、お薬を採りに入らしたのでございますか。」

言ごんか下に、

「實際いのちがけ命いのちがけ懸いで来ました。」と思入いつて答えると、女はしめ

やかに、

「それでは、よくよくの事でおあんなさいませようねえ。

でも何もそんな難むずかしい御山おやまではありません。但此処ただここは靈れいざん山さんと

か申す事、酒を覆こぼしたり、竹の皮を打棄うっちゃつたりする処ところではない

のでございます。まあ、難ありがた有あいお寺の庭、お宮の境けいだい内うち、上うえつ

方がたの御門ごもんの内うちのような、歩けば石一つありませんでも、何となく

つつし  
 謹みませんとなりませんばかりなのでございます。そして貴方は、  
 美女ヶ原にお心覚えの草があつて、其処までお越し遊ばすに、二  
 日も三日もお懸りなさらねばなりませんような気がすると仰有  
 います、何時か一度お上り遊ばした事がございますか。」  
 「一度あるです。」

「まあ。」

「確に美女ヶ原というそれでしような、何でも躑躅や椿、菊も藤  
 も、原一面に咲いていたと覚えています。けれども土地の名どこ  
 ろじゃない、方角さえ、何処が何だか全然夢中。」

今だつてやつぱり、私は同一この国の者なんです、その時は  
 何為か家を出て一月余、山へ入つて、かれこれ、何でも生れてか

ら死ぬまでの半分は徜徉さまよつて、漸々ようよう其処そこを見たように思うです  
が。」

高坂は語りつつも、長途ちやうとに苦み、雨露あめつゆに曝さらされた当時を思  
い起すに付け、今も、氣弱しんり、神疲しんれて、ここに深山みやまに塵ちり一つ、  
心に懸かからぬ折ながら、なおかつ垂たらたらと背そびらに汗。

糸いとのような一ひと条路すじ、背後うしろへ声を運ぶのに、力を要した所せ為いも  
あり、薬王品やくおうほんを胸むねに抱いだき、杖つえを持った手に帽ぼうを脱ぐと、清ひたき額い  
を拭ぬぐうのであった。

それと見る目も敏さとく、

「もし、御案内ご案内がてら、あの、私わたしがお前まへへ参まゐりました。どうぞ、  
その方がお話うけたまわも承うけたまわりようございますから。」

一議いちぎに及およばず、草鞋わらじを上げて、道を左へ片避かたよけた、足の底へ、草の根ねが柔やわらかに、葉末はすえは脛はぎを隠したが、裾すそを引く荊いばらもなく、天地閑てんちかんに、虫の羽音はおとも聞えぬ。

## 三

「御免なさいまし。」  
 と花売はなうりは、袂たもとに留めた花片はなびらを惜おしやはらはら、袖そでを胸むぐらに引合せ、身を細くして、高坂の体を横すりぬに擦抜けたその片足むぐらも葎むぐらの中、路はさばかり狭いのである。

五尺ばかり前にすらりと、立直たちなおる後姿もすそ、裳もすそを籠めた草の茂り、



近く緑に、遠く浅葱あさぎに、日の色を隈取るくまど他に、一木のありて長く影を倒すにあらず。

背後うしろから声を掛け、

「大分だいぶん草深くなりますな。」

「段々頂いただきが近いんですよ。やがてこの生はえが人丈ひとだけになつて、私の姿が見えませんかようになりますと、それを潜くぐつて出ます処ところが、もう花の原でございます。」

と撫肩なでかたの優しい上へ、笠の紐弛ゆるく、紅べにのような唇をつけて、

横顔ふりむで振向いたが、清すずしい目許めもとに笑えみを浮べて、

「どうして貴方あなたはそんなにまあ唐天竺からてんじくとやらへでもお出いで遊ばすように遠い処とお思いなさるのでございましょう。」

高坂は手なる杖を荒く支ついて、土を騒がす事さえせず、慎つつしんで後あとに続き、

「久しい以前です。一体誰でも昔の事は、遠く隔へだたつたように思うのですから、事柄と一いっしょ所に路までも遙はるかに考えるのかも知れませ  
ん。そうして先みんなず皆夢ですよ。

けれども不のこらず残事実で。

私が以前美女ヶ原で、薬草を採つたのは、もう二十年、十年が  
一ひとむかし昔、ざつと一ふたむかし昔も前になるです、九歳ここのつの年の夏。」

「まあ、そんなにお稚ちいさい時。」

「尤もつとも一人じやなかつたです。さる人に連れられて来たですが、  
始め家を迷つて出た時は、東西も弁わきまえぬ、取つて九歳ここのつの小児こどもば

かり。

人は高坂の光、私の名ですね、光坊が魔に捕られたのだと言いました。よくこの地で言う、あの、天狗に攫われたそれです。また実際そうかも知れんが、幼心で、自分じゃ一端親を思つたつもりで。

まだ両親ともあつたんです。母親が大病で、暑さの取附にはもう医者が見放したので、どうかしてそれを復したい一心で、薬を探しに来たんですな。」

高坂は少時黙つた。

「こう言うと、何か、さも孝行の吹聴をするようで人間が悪いですが、姉さん、貴女ばかりだから話をする。」

今でこそ、立派な医者もあり、病院も出来たけれど、どうして城下が二里四方に開けていたって、北国の山の中、医者らしい医者もない。まあまあその頃、土地第一という先生まで匙を投げてしまいました。打明けて、父が私たちに聞かせるわけのものじゃない。母様は病気が悪いから、大人しくしろよ、くらいにしてあつたんですが、何となく、人の出入、家の者の起居挙動、大病というのは知れる。

それにその名医というのが、五十恰好で、天窓の元げたくせに髪の毛の黒い、色の白い、ぞろりとした優形な親仁で、脈を取るにも、蛇の目の傘を差すにも、小指を反して、三本の指で、横笛を吹くか、女郎が煙管を持つような手付をする、好かない奴。

私がちよこちよこ近<sup>きんじよ</sup> 処<sup>じよ</sup>だから駈<sup>かけ</sup>出しては、薬<sup>くすり</sup>取<sup>とり</sup>に行くの  
 でしたが、また薬局というものが、その先生の甥<sup>おい</sup>とかいう、ぺろり  
 と長い顔<sup>ひたい</sup>の、額<sup>へい</sup>から紅<sup>べに</sup>が流れたかと思う鼻<sup>な</sup>の尖<sup>さき</sup>の赤い男、薬<sup>くすり</sup>箆<sup>だ</sup>  
<sup>んす</sup>の小抽斗<sup>こひきだし</sup>を抜いては、机の上に紙を並べて、調合をするで  
 すが、先<sup>さ</sup>ずその匙<sup>さじ</sup>加減<sup>かげん</sup>が如何<sup>いか</sup>にも怪<sup>あや</sup>しい。  
 相<sup>そう</sup>応<sup>おう</sup>に流<sup>は</sup>行<sup>や</sup>つて、薬<sup>くすり</sup>取<sup>とり</sup>も多いから、手<sup>て</sup>間<sup>ま</sup>取<sup>と</sup>るのが焦<sup>し</sup>つた  
 さに、始<sup>じ</sup>終<sup>しゆ</sup>行<sup>ゆ</sup>くので見<sup>み</sup>覚<sup>かく</sup>えて、私<sup>わたし</sup>がその抽<sup>ひ</sup>斗<sup>き</sup>を抜<sup>ぬ</sup>いて五<sup>ご</sup>つも六<sup>ろく</sup>  
 つも薬<sup>くすり</sup>局<sup>じよ</sup>の机<sup>けい</sup>に並<sup>なら</sup>べて遣<sup>や</sup>る、終<sup>しま</sup>いには、先<sup>さ</sup>方<sup>かた</sup>の手<sup>て</sup>を待<sup>まち</sup>たないで、自<sup>みづか</sup>  
 分<sup>ぶん</sup>で調<sup>てう</sup>合<sup>かく</sup>をして持<sup>も</sup>つて帰<sup>かえ</sup>りました。私<sup>わたし</sup>のする方<sup>かた</sup>が、かえつて目<sup>め</sup>方<sup>かた</sup>  
 が揃<sup>そろ</sup>うくらい、大<sup>だい</sup>病<sup>びやう</sup>だつて何<sup>なに</sup>だつて、そんな覚<sup>おぼ</sup>束<sup>つか</sup>ない薬<sup>くすり</sup>で快<sup>くわい</sup>く  
 なろうとは思<sup>おも</sup>えんじやありませんか。

その頃父は小立野こだつのと言う処ところの、験げんのある藥師やくしを信心で、毎日参詣するので、私もちよいちよい連れられて行つたです。

後のちは自分ばかり、乳母うぼに手を曳ひかれてお詣まいりをしましたツけ。別に拝みようも知らないので、唯ただ、母親の病氣の快くなるようと、手を合せる、それも遊び半分。

六月の十五日は、私の誕生日で、その日、月代さかやきを剃そつて、湯に入つてから、紋着もんつきの袖そでの長いのを被きせてもらいました。

私がと言つては可笑おかしいでしよう。裾模様すそもようの五ツ紋いつもん、熨斗目のしめの

派手な、この頃聞きや加賀染かがぞめとかいう、菊だの、萩はぎだの、桜だの、花束もんが紋もんになつてゐる、時節ときせふに構かまわず、種いろいろ々の花はなを染交そめませてあります。尤もつとも今いま時ときそんな紋着もんつきを着る者はない、他国たこくには勿論もちろん

ないですね。

一体この医王山に、四季の花が一時いちじに開く、その景勝を誇るために、加賀かがばかりで染めるのだそうですな。

まあ、その紋着を着たんですね、博多はかたに緋ひの一本いっぽん独ど鉦つこの小こども児おび帯おびなぞで。

坊ぼくやは綺麗きれいになりました。母おくれげも後おくれげ毛かきあを搔かきあ上げて、そして手ちよう水ずを使ずつて、乳母うばが背後うしろから羽織はおらせた紋着もんぎに手てを通して、胸むねへ水色みづいろの下したじめを巻まいたんだが、自分で、帯おビを取とつてメメ《しめ》ようとする、それなり力ちからが抜ぬけて、膝ひざを支たいたので、乳母うばが慌あわてて確しつかり乎だ抱だくと、直すくに天鵝びろうど絨じゆの括くくりまくらまくら枕まくらに鳩尾みぞおちをおさ圧おさえて、その上うへへ胸むねを伏ふせたですよ。

産んで下すつた礼を言うのに、唯御機嫌好うとさえ言えば可いと、父から言いつかつて、枕頭に手を支いて、其処へ。顔を上げた私と、枕に凭れながら、熟と眺めた母と、顔が合うと、坊や、もう復るよと言つて、涙をはらはら、差俯向いて弱々となつたでしよう。

父が肩を抱いて、徐と横に寝かした。乳母が、搔巻を被せ懸けると、襟に手をかけて、向うを向いてしまいました。

台所から、中の室から、玄関あたりは、ばたばた人の行交う音もつと尤も帯をしめようとして、濃いお納戸の紋着に下じめの装で倒れた時、乳母が大声で人を呼んだです。

やがて医者者が袴の裾を、ずるずるとやって駈け込んだ。私に



は戸外へ出て遊んで来いと、乳母が言ったもんだから、庭から出たです。今も忘れない。何とも言いようのない、悲しい心細い思いがしましたな。」

花売はなうりは声細く、

「御道理ごもつともでございますねえ。そして母おつかさん様はその後のちよ快くおなりなさいましたの。」

「お聞きなさい、それからです。」

小児こどもは切せめて仏そでの袖すがに縫ぬろうと思おもつたでしよう。小立野こだつのと言いうは場末ばすえです。先まず小こさな山やまくらいはある高台たかだい、草くさの茂さかつた空地あきちだくさ沢さわ山さんな、人ひと通とりのない処ところを、その薬師堂やくしどうへ参まつたですが。

朝あさの内に月代さかやき、沐浴ゆあみなんかして、家いへを出いたのは正午ひるすぎ過すぎだった

けれども、何時頃薬師堂へ参詣して、何処を歩いたのか、どうして寝たのか。

翌朝はその小立野から、八坂と言います、八段に黒い滝

の落ちるような、真暗な坂を降りて、川端へ出ていた。川は、鈴見という村の入口で、流も急だし、瀬の色も凄いです。

橋は、雨や雪に白つちやけて、長いのが処々、鱗の落ちた形に中弛みがして、のらのらと架っているその橋の上に茫然と。

後に考えてこそ、翌朝なんです、その節は、夜を何処で明かしたか分らないほどですから、小児は晩方だと思いました。この医王山の頂に、真白な月が出ていたから。

しかし残ざんげつ月であつたんです。何なぜ為かというにその日の正午頃ひる、  
 ずっと上流の怪あやしげな渡わたしを、綱つかに掴つかまつて、宙つるへ釣つるされるように  
 して渡わたつた時は、顔かが赫かつとする晃きらきら々はげしと烈ひあたりい日ひあたり当。  
 こういうと、何あけがただか明あけがた方あけがただか晚ばんがた方ばんがただか、まるで夢のように  
 聞きえるけれども、渡わたしを渡わたつたには全く渡わたつたですよ。

山路やまじは一日いちにちがかりと覚悟かくごをして、今度いまど来るには麓ふもとで一泊ひと泊したで  
 すが、昨日きのう丁度ちやうど前の時ときと同一おなじ時刻じこく、正午頃ひるです。岩いも水みづも真白ましろ  
 な日ひ当あたりの中なかを、あわたしの渡わたを渡わたつて見みると、二十年にじゅうねんの昔むかしにふな変ならず、  
 船ふな着つの岩いも、船ふな出での松まつも、確たしかに覚さえがありました。

しかし九歳ここのつで越こした折ひらは、爺じいさんの船頭せんとうがいて船ふねを扱つかいまし  
 たつけ。

昨日きのうは唯綱ただを手繰たぐつて、一人で越こしたです。乗合のりあいも何なんもない。  
 御存ごぞんじの烈ながれしい流ながで、棹さおの立たつ瀬せはないですから、綱なは一ふた二すじ条、  
そのもの染物ぞめものをしんし張はりにしたように隙間すきまなく手懸てがかりが出来できている。船  
 は小こさし、胴どうの間まへ突立つたつて、釣つり下さがつて、互たがいちがい違ちがいに手てを掛かけ  
 て、川幅けん三十間さんじゅうばかりを小半時こはんとき、幾度いくたびもはつと思おもつちや、危あぶな  
 さに自然ひとりでに目めを塞ふさぐ。その目めを開ひらける時とき、もし、あたの丈たけの伸のび  
 た菜種なたねの花はなが断崖がけの巖越いわごしに、ばらばら見えんでは、到底とてどもこの世

の事こととは思おもわれなかつたろうと考えかんがえます。  
 十里四方じゅうりしやうには人ひとらしい者ものもないように、船ふねを纜もやつた大木おほきの松まつの  
 幹たてに立札たてふだして、渡船わたしせん銭せん三文さんとある。

話わは前まへ後あとになりなりました。

そこで小兒は、鈴見の橋に亘んで、前方を見ると、正面の中  
 空へ、仏の掌を開いたように、五本の指の並んだ形、轟々立  
 つたのが戸室の石山。靄か、霧か、後を包んで、年に二、三度  
 好く晴れた時でない、蒼く頭れて見えないのが、即ちこの医王  
 山です。

其処にこの山があるくらいは、予て聞いて、小兒心にも方角  
 を知っていた。そして迷子になつたか、魔に捉られたか、知れも  
 しないのに、稚な者は、暢気じゃありませんか。

それが既に気が変になつていたからであろうも知れんが、お腹  
 が空かぬだけに一向苦にならず。壊れた竹の欄干に掴つて、  
 月の懸つた雲の中の、あれが医王山と見ている内に、橋板をこ

とこと踏んで、

むこう

向の山に、猿が三疋住みやる。中の小猿が、能う物饒舌る。何

こども

と小児ども花折りに行くまいか。今日の寒いに何の花折りに。牡

たん丹、芍薬、菊の花折りに。一本折つては笠に挿し、二本折つ

しやくやく芍薬、

菊の花折りに。一本折つては笠に挿し、二本折つ

ては、蓑に挿し、三枝四枝に日が暮れて……とふと唄いながら。

……

何となく心に浮んだは、ああ、向うの山から、月影に見ても色

くれない

の紅な花を採つて来て、それを母親の髪に挿したら、きつと病氣

なお

が復るに違いないと言う事です。また母は、その花を簪にしても

かんざし

似合うくらい若かつたですな。」

高坂は旧来た方を顧みだが、草の外には何も無い、一步前へ

もと

かた 顧み

ほか

ひとあし 一步

花売はなうりの女、如何いかににも身に染みて聞くように、俯向うつむいて行くのであつた。

「そして確たしかに、それが薬師やくしのお告つげであると信じたですね。

さあ思い立つては矢も楯も堪たまらない、渡り懸けた橋を取つて返して、堤防どて伝いに川上へ。

後あとでまた渡わたしを越えなければならぬ路ですがね、橋から見ると

山の位置ありかは月の入る方へ傾いて、かえつて此処ここから言つと、対むこう

岸ぎしの行留ゆきどまりの雲の上らしく見えますから、小兒心こどもごころに取つて

返したのが丁ど幸と、橋から渡場わたしばまで行く間の、あの、岩淵いわぶち

の岩は、人を隔てる医王山の一の砦いちとりでと言つても可よい。戸室とむろの石いし

山の麓まが直すぐに流ながれに迫る処ところで、累かさなり合つた岩石だから、路そこは其処

で切れるですものね。

岩淵をこちらに見て、おおかたはだし大方跣足でいたでしょう、すたすた五里も十里も辿たどつた意で、ひる正午頃に着いたのが、なるこわたし鳴子の渡。」

#### 四

「馬士まごにも、荷担夫にかつぎにも、畑打はたうつ人にも、三人二人にん にんぐらいずつ、村一つ越しては川沿かわぞいの堤防どてへ出ること逢あつたですが、みんなだた皆唯立ちどま停とつて、じろじろ見送みおくつたばかり、言葉を懸かける者はなかつたです。これは熨斗目のしめの紋着もんつき振り袖ふりそでという、田舎めづらに珍しい異形いぎような扮装なりだったから、不思議な若殿うかつ、迂濶うかつに物も言えないと考えた



か、真昼間まっぴるま、狐が化けた？ とでも思ったでしょう。それとも本人逆上返のぼせかえつて、何を言われても耳に入らなかつたのかも解わからんですよ。

ふとその渡場わたしばの手前で、背後うしろから始めて呼び留めた親仁おやじがあります。兄にいや、兄にいやと太い調子。

私は仰向あおむいて見ました。

ずんぐり脊せの高い、銅色あかがねいろの巖がんじょう乗よう造づくりな、年配四十五、六、古い単衣ひとえの裾すそをぐいと端折はしよつて、赤脛からずねに脚絆きやはん、素足すげがさに草鞋らじ、かつと眩まぼゆいほど日が照るのに、笠は被かぶらず、その菅笠すげがさの紐ゆわに、桐油合羽とうゆがっぱを畳たたんで、小さく縦たてに長く折つたのを結ゆわえて、振分ふりわけにして肩に投なげて、両提ふたつきげの煙草入たばこいれ、大きいのをぶら提さげ

て、どういう気か、しぶうちわ 洩団扇で、はたはたと胸毛を煽あおぎながら、  
てくりてくり寄つて来て、何どこ処へ行くだ。

おやま 御山へ花を取りに、と返事すると、ふんそれならば可よし、小父おじ  
どうし が同士どうし に行つて遣やるべい。但ただし、この前の渡を一つ越さきさねばならぬ  
で、渡守わたしもり が咎とがめだて立たてをかつばまたと面倒じや、さあ、負おぶされ、と言  
うて背中を向けたから、合羽かっぱを跨またぐ、足を向うへ取つて、猿さるの児こ  
背負おんぶ、高く肩車に乗せたですな。

その中うちも心の急せく、山はと見ると、戸室とむろが低くなつて、この医  
王山あぎやかが鮮明ふかみどりな深翠みおろ、肩の上から下に瞰みおろ下されるような気が  
しました。位置は變つて、川の反対むこうの方に見えて来た、なるほど  
渡わたしを渡らねばなりませんまい。



つた大巖の肚へ、ぴたりと船が吸寄せられた。岸は可恐く水は深い。

巖角に刻を入れて、これを足懸りにして、こちらの堤防へ上るんですな。昨日私が越した時は、先ず第一番の危難に逢うかと、膏汗を流して漸々縋り着いて上ったですが、何、その時の親仁は……平気なものです。」

高坂は莞爾して、

「爪尖を懸けると更に苦なく、負さった私の方がかえって目を塞いだばかりでした。」

さて、些と歩行かつせえと、岸で下してくれました。それから少しずつ次第に流に遠ざかって、田の畦三つばかり横に切れる

と、今度は赤土あかつちの一本道、両側にちらほら松の植わっている処ところへ出ました。

六月の中ばとはいっても、この辺には珍しい酷暑めずらひど暑い日だと思  
いしましたが、川を渡り切った時分から、戸室山とむろやまが雲を吐いて、  
ところどころ

処々なみき 田の水へ、真黒な雲が往つたり、来たり。

並木の松と松との間が、どんよりして、梢こずえが鳴る、と思うとは

や大粒な雨がばらばら、立樹たちきを五本と越えない中に、車軸うちを流す

烈しい驟雨ゆうだち。ちよつ待て待て、と独言ひとりごとして、親仁おやしが私の手

を取つて、そら、台なしになるから脱げと言うままにすると、帯  
を解いて、紋着もんつきを剥はいで、浅葱あさぎの襟えりの細く掛かかつた襦袢じゆばんも残ら  
ず。

こども  
小児は糸も懸けぬ全裸体。  
まるはだか

雨は浴るようだし、恐さは恐し、ぶるぶる顫えると、親仁が、  
あび  
強いぞ強いぞ、と言つて、私の衣類を一丸げにして、懐中を膨  
ひとまる  
らますと、紐を解いて、笠を一文字に冠つたです。  
かぶ

それから幹に立たせて置いて、やがて例の桐油合羽を開いて、  
とうゆがっぱ  
私の天窓からすつぽりと目ばかり出るほど、まるで渋紙の小児  
あたま  
の小包。

いや！ 出来た、これなら海を潜つても濡れることはない、  
もぐ  
さあ、真直に前途へ駆け出せ、曳、と言うて、板で打たれたと  
まっすぐ  
むこう  
しり  
思つた、私の臀をびたりと一つ。

濡れた団扇は骨ばかりに裂けました。  
うちわ

怪飛けしとんだようになつて、蹠よろ踏りけて土砂降どしやぶりの中を飛出とびだすと、く

りりと合羽かっぱに包まれて、見えるは脚ばかりじやありませんか。

あかがえる

赤蛙あかがえるが化けたわ、化けたわと、親仁おやしが呵から々と笑つたです

が、もう耳も聞えず真暗まつくらさんぼう三宝。何か黒山くろやまのような物に打付ぶつ

かつて、斛斗もんどりを打つて仰のけ様に転ぶと、滝のような雨の中に、

ひひんと馬いななの嘶いななく声。

ようよう

漸々ようよう人の手に扶たすけ起おこされると、合羽を解といてくれたのは、五

十ばかりの肥ぽあつた婆ばあさん。馬士まごが一人腕組うでぐみをして突立つたつていた。

門かどの柳みどりの翠みどりから、黒駒くろこまの背しずくへ雫しずくが流れて、はや雲くも切ぎれがして、

その柳こずえの梢こずえなどは薄雲あおぞらの底そこに蒼空あおぞらが動うごいています。

妙なものが降り込んだ。これが豆腐とうふなら資本もとでい入いらずじや、それ

ともこのまま熨斗のしを付けて、鎮守様ちんじゆさまへ納めおささつしやるかと、馬ま士ごてのひらは掌すいで吸殻がらをころころ遣やる。

ぬし 主ぬしさ、どうした、と婆さんが聞くんですが、四辺あたりをきよときよとみまわすばかり。

どっこ 何処どこから出た乞食こじきだよ、とまた酷ひどいことを言います。尤もつとも裸はだか体が洩紙しふかみに包まれていたんじや、氏素性うじすじようあろうとは思わぬはず。衣物きものを脱がせた親仁おやしはと、唯悔ただくやしく、来た方を眺めると、脊せが

小さいから馬の腹を透すかして雨上りの松並木、青田あおだの縁へりの用水へりに、白鷺しらさぎの遠く飛ぶまで、睨なわてがずっと見渡されて、西日がほんのり紅あかいのに、急な大雨で往来ゆきぎもばったり、その親仁らしい姿も見えぬ。



あまり  
余の事にしくしく泣き出すと、こりや餒ひもじゆうて口も利けぬな、商  
 きないものぜにに  
 売品で銭を噛ませるようじゃけれど、一つ振舞ふるもうて遣やるかいと、  
 きたな  
 汚い土間に縁えんだい台を並べた、狭ツくるしい暗い隅すみの、苔こけの生えた  
 おけ  
 桶の中から、豆腐とうふを半はんちよう挺しわで、皺手しわでに白く積んで、そりやそりや  
 と、頬ほつぺた辺ところの処へ突出つきだしてくれましたが、どうしてこれが食べら  
 れますか。

そのくせ腹は干ほされたように空いていました。が、胸一杯になつ  
 て、頭かぶりを掉ふると、はて食しよく好このみをする犬の、と呟つぶやいて、ぶくりと  
 また水へ落して、これや、慈悲を享うけぬ餓鬼がきめ、出て失うせと、私  
 の胸へ突懸つツかけた皺だらけの手の黒さ、顔も漆うるしで固めたよう。

黒婆くろばばどの、情なさけない事せまいと、名もなるほど黒婆くろばばといふのか、

馬士まごが中へ割つて入ると、貸かしを返せ、この人足めと怒鳴どなつたです。するとその豆腐の桶のある後うしろが、蜘蛛くもの巣だらけの藤棚で、これを地境じざかいにして壁も垣かきもない隣家の小家のこいえ、炉ろの縁ふちに、膝に手を置いて蹲うづくまつていた、十ばかりも年上らしいお媼おばあさん。

見兼ねたか、縁側えんがわから摺ずつて下り、ごつごつ転がった石塊いしころを跨またいで、藤棚を潜くぐつて顔を出したが、柔和にゆうわな面相おもぎし、色が白い。

小児衆こどもしゆう小児衆こどもしゆう、私わしが許とこへござれ、と言う。疾はやく白媼しろうばが家うちへ行ゆかつしやい、借かりがなくば、此処ここへ馬を繋ぐではないと、馬士まごは腰こしの胴どうらん乱きせるに煙管きせるをぐつと突つ込んだ。

そこで裸体はだかで手を曳ひかれて、土間の隅を抜けて、隣家となりへ連つれ込ま

れる時分には、鳶とびが鳴いて、遠くで大勢の人声、祭礼まつりの太鼓たいこが聞えしました。」

高坂は打案うちあんじ、

「渡場わたしばからこちらは、一生私が忘れない処ところなんだね、で今度来

る時も、前の世さきの旅を二度する気で、松一本、橋一ツも心をつけて見たんだけれども、それらしい家もなく、柳の樹も分らない。

それに今じや、三里ばかり向うを汽車が素通りにして行くゆくようになったから、人ひと通どもなし。大方、その馬士まごも、老人としよりも、も

うこの世の者じやあるまいと思う、私は何だかその人たちの、あのまま影うずを埋うめた、丁ちようどその上を、姉ねえさん。」

花売はなうりは後姿うしろすがたのまま引留ひきとめられたようになって停とまった。

「貴女あなたと二人で歩行あるしているように思うですがね。」

「それからどう遊ばした、まあお話しなさいまし。」

と静しずかに前へ。高坂おもむも徐ろに、

「娘が来て世話をするまで、私わしには衣服きものを着せる才覚もない。暑い時節じやで、何ともなかるが、さぞ餒ひもじかろうで、これでも食わつしやれつて。」

囲炉裡いろりの灰の中に、ぶすぶすと燻くすぶっていたのを、抜き出してくれたのは、串くしに刺した茄子なすの焼いたんで。

ぶくぶく樺かばいろ色ふくに膨ふくれて、湯気ゆげが立っていたです。

生豆腐なまどうふの手摺てづかみに比べては、勿体もったいない御料理ごりょうりと思った。そ

れにくれるのが優やさしげなお婆さん。

地つちが性しように合うで好よう出来るが、まだこの村でも初はつ物ものじやとい  
 う、それを、空すき腹ばらへ三つばかり頬ほ張おりました。熱つゆい汗つゆが下した腹ばら  
 へ、たらたらと染しみた処ところから、一ひと睡ねむりして目が覚めると、きや  
 きや痛み出して、やがて吐くやら、瀉くだすやら、尾籠びろうなお話だが七し  
ちてんはつとう顛八倒。能よくも生きていられた事と、今でも思うです。しかし、  
 もうその時は、命の親の、優しい手に抱かれていました。世にも  
 綺麗きれいな娘で。

人心ひとこころ地ちもなく苦しんだ目が、幽かすかに開いた時、初めて見た姿は、  
 艶つやかな黒髪くろかみを、男のような鬢まげに結んで、緋縮緬ひぢりめんの襦袢じゆばんを片か  
たはだ肌脱いでいました。日が経たつて医王山へ花を採りに、私の手を  
ひ曳ひいて、楼たかどのに朱の欄干てすりのある、温泉宿を忍んで裏口から朝月夜あさづきよ

に、田圃道へ出た時は、中形の浴衣に襦子の帯をしめて、  
 鎌を一挺、手拭にくるんでいたです。その間に、白媪の内を、  
 私を膝に抱いて出た時は、鬘を唐輪のように結つて、胸には玉を  
 飾つて、丁ど天女のような扮装をして、車を牛に曳かせたのに  
 乗つて、わいわいという群集の中を、通つたですが、村の者が  
 かわがわ交る交る高く傘を撃掛けて練つたです。ね。

むらはずれ  
 村 端で、

寺に休むと、此処で支度を替えて、

多勢が口

々に、御苦労、御苦労というのを聞棄てに、娘は、一人の若い  
 者に負させた私にちよつと頬摺をして、それから、石高路の  
 坂を越して、賑かに二階屋の揃つた中の、一番屋の棟の高い家へ  
 入つたですが、私は唯幽に呻吟していたばかり。尤も白姥の家

に三晩寝ました。その内も、娘は外へ出ては帰つて来て、ひざまく膝

枕くらをささせて、始終集たかつて来る馬蠅うまばえを、払つてくれたのを、現

に苦くるしみながら覚えています。車に乗つた天女に抱かれて、多たにんず人数

に囲かよまれて通つた時、庚申堂こうしんどうの傍わきに榛はんの木で、半なかば姿を秘かくして、

群集ぐんじゆを放れてすつくと立つた、脊せいの高い親仁おやじがあつて、熟じつと私

どもを見ていたのが、確たしかに衣服を脱がせた奴と見たけれども、小こ

兎どもはまだ口が利けないほど容ようだい体が悪かつたんですな。

私はただその気高けだかい艶あでやか麗な人を、今でも神か仏かと、思しうけ

れど、後あとで考えると、先まづさうだろうと、思しわれるのは、姥うばの娘

で、清しみずだに水谷の温泉へ、奉ほうこう公こうに出いていたのを、祭まつりに就ついて、村

の若い者が借りて来て八ヶ村そん九ヶ村そんをこれ見よと喚わめいて歩ある行るいた

ものでしよう。娘はふとすると、湯女などであつたかも知れないです。」

## 五

「それからその人の部屋とも思われる、綺麗な小座敷へ寝かさされて、目の覚める時、物の欲しい時、咽の乾く時、涙の出る時、何時もその娘が顔を見せない事はなかつたです。

自分でも、もう、病気が復つたと思つた晩、手を曳いて、てらてら光る長い廊下を、湯殿へ連れて行つて、一所に透通るよ  
うな温泉を浴びて、岩を平にした湯槽の傍で、すっかり体を流し



てから、櫛くしを抜いて、私の髪を柔やわらかかすく梳すいてくれる二櫛ふたくし三櫛しみくし、や  
 がてその櫛を湯殿の岩の上から、廊下の灯あかりに透すかして、気高い横顔  
 で、熟じつと見て、ああ好いい事、美しい髪も抜ひけず、汚きたいな  
 虫も付なかなかつたと言いいました。私も気がさして一いっしよ所に櫛を噴みつめたが、自  
 分の膚はだも、人の体も、その時くらい清く、白く美しいのは見た事  
 がない。

私は新しい着物を着せられ、娘は桃色の扱しご帯きのまま、また手を  
 曳ひいて、今度は裏うら梯子ぼしごから二階へ上あった。その段を昇り切ると、  
 とツつきつきひとまに一室、新たてまましく建増たて増ましたと見えて、襖ふすまがない、白ゆかい床へ、  
 月影げいが澆ぼつと射した。両側の部屋は皆陰いん々いんと灯ともを置いて、鎮しずり返か  
 った夜半よなかの事です。

好い月だこと、まあ、とそのまま手を取って床板を踏んで出ると、小窓が一つ。それにも障子が無いので、二人で覗くと、前の藁は露が流れて、銀が溶けて走るよう。

月は山の端を放れて、半腹は暗いが、真珠を頂いた峰は水が澄んだか明るいので、山は、と聞くと、医王山だと言いました。

途端にくわいと狐が鳴いたから、娘は緊乎と私を抱く。その胸に額を当てて、私は我知らず、わつと泣いた。

怖くはないよ、否怖いのではないと言って、母親の病気の次第。こういう澄み渡った月に眺めて、その色の赤く輝く花を採って帰りたいと、始めてこの人ならばと思つて、打明けて言うくと、暫く黙つて瞳を据えて、私の顔を見ていたが、月夜に色の真紅な花――

—きつと探しましよと言つて、——可し、可し、女の念で、と  
 後を言い足したですね。

翌 晩、夜更けて私を起しますから、素よりこつちも目を開  
 けて待つた処、直ぐに支度をして、その時、帯をきりりとゞ《し》  
 めた、引掛に、先刻言いましたね、刃を手拭でくるくると巻い  
 た鎌一挺。

それから昨夜の、その月の射す窓から密と出て、瓦屋根へ下  
 りると、夕顔の葉の搦んだ中へ、梯子が隠して掛けてあつた。伝  
 つて庭へ出て、裏木戸の鍵をがらりと開けて出ると、有明月の  
 山の裾。

医王山は手に取るように見えたけれど、これは秘密の山の搦

手で、其処そこから上のぼる道はないですから、戸室口とむろぐちへ廻まわつて、攀よじ上のぼつたものと見えます。さあ、此処ここから目差めざす御山おやまというま  
でに、辻堂つじどうで二晩ふたばん寝ねました。

後はあとどう来たか、恐こわい姿、凄すげい者の路みちを遮さへぎつて顕あらわるる度たびに、娘  
は私わたくしを背後うしろに庇かばうて、その鎌かまを差さしかぎ翳すつくし、蠱こもと立つと、鎧よろうた姫ひめ  
神めがみのように頼母たのもしいにつけ、雲くもの消えるように路みちが開ひらけてずん  
ずんと。」

時に高坂は布ぬいを断きつが如ごとき音を聞きいて、唯と見ると、前まへへ立つた、  
女の姿すがたは、その肩かたあたりまで草くさがく隠かくれになつたが、背後うしろざまに手  
を動かうごかすに連つれて、鋭とき鎌かま、磨こける玉たまの如ごとく、弓ゆみ形なりに出い没めして、  
歩ある行あるき歩ある行あるき掬すくいぎり切きりに、刃形はがたが上うえ下したに動うごくと共に、丈たけなす茅ち

萱が半かばから、凡およそ一ひと抱かかえずつ、さつくと切れて、靡なびき伏して、隠ひそれた土が歩ほいつ歩つ、飛とび々とびに躪あらわれて、五尺三尺一尺ずつ、前途ゆくてに渠かれを導くのである。

高坂は、悚然ぞつとして思わず手を挙げ、かつて婦おんなが我なに為なしたる如く伏ふし拝おがんで肅然しゆくぜんとした。

その不意たちどまに立停たちどまつたのを、行ゆきな悩なやんだと思つたらしい、花はな売りは軽かろく見返り、

「貴方あなた、もう些ちつとでございますよ。」

「どうぞ。」といった高坂は今更ながら言葉さえ謹つつしんで、

「美女ヶ原に今もその花がありましたでしょうか。」

「どうも身に染しむお話。どうぞ早く後あとをお聞きかせなさいまし、そし

てその時、その花はござんしたか。」

「花は全くあつたんですが、何時もそうやって美女ヶ原へお出の事だから、御存じはないでしょうか。」

「参りましたら、その姉さんがなすつたように、一所にお探し申しましょう。」

「それでも私は月の出るのを待ちますつもり。その花籠にさえ一杯になったら、貴女は日一杯に帰るでしょう。」

「否、いつも一人で往復します時は、馴れて何とも思いませんでございましたけれども、じお連が出来て見ますと、もう寂しくって一人では帰られませんから、御一所にお帰りまでお待ち申しましょう。その代どうぞ花籠の方はお手伝い下さいましな

」。

「そりや、いうまでもありません。」

「そしてまあ、どんな処ところにございましたえ。」

「それこそ夢のようだと、いうのだろうと思います。路みちすがら、

そうやって、影のような障しょうがい礙がいに出遇いつて、今にも娘が血に染

まつて、私は取つて殺さりようと、幾いくたび度思おもつたか解わかりませんが、

黄たそがれ昏くれと思う時、その美女ケ原およそちようというのでしよう。凡およそちよう八町四方ば

かりの間、扇あふぎの地紙じがみのような形に、空にも下にも充いっばい満まんの花です。

そのまま二人ふにんで跪ひざまずいて、娘むすめがするのように手を合あせておりました。

月つきが出ると、余たやすり容易やすい。つい目の前まへの芍しやくやく薬やくの花はなの中に花はなび

片ちの形かたちが變かつて、真ま紅かななのが唯ただ一いち輪りん。

採つて前髪まえがみに押頂おしいただいた時、私の頭つむりを撫なでながら、余あまりの嬉うれしき、娘ははらはらと落涙らくるいして、もう死ぬまで、この心を忘れてはなりませんと、私の頭つむりに挿ささせようとしましたが、髪は結んでないのでですから、そこで娘が、自分の黒髪に挿さしました。人かんざしの簪かんざしの花になつても、月影に色は真紅しんくだつたです。

母おつかさん様の御大病ごたいびよう、一刻も早くすくと、直すくに、美女ヶ原あとを後あとにしました。

引返す時は、苦くもなく、すらすらと下りられて、早あかつきとりや暁あかつきとりの鶏とりの  
 声。

嬉うれしや人里どやどやも近いと思う、月づれが落ちて明方あけがたの闇やみを、向むかうから、  
 洵どやどや々と四よ、五人ごにん連づれ、松明たいまつを挙あげて近寄ひとなつかしつた。人可ひと懐なつかしくいそ



いそ寄ると、いづれも屈くつき 竟ような荒あ漢らので。

中うちに一人、見た事のある顔と、思い出した。黒婆くろばばが家に馬を

繋まごいだ馬士まごで、その馬士、二人の姿を見ると、遁にがすなと突いきなり然、

私を小脇ひっかかに引ひっかか抱かかえる、残のこつた奴やつが三人四人で、ええ！ という

娘むすめを手取てとり足取あしとり。

何処どこをどう、どの方角をどのくらい駈かけたかまるで夢中むちゆうです。

やがて気が付くと、娘と二人で、大おお座敷ざしきの片隅かたぐみに、馬士まご交まじり

七、八人に取巻とくまきかれて坐まつていました。

何百年ななひゃくねんか解わからない古ふる襖ふすまの正面まへ、板まの間のまような床ゆかを背負しよつ

て、大胡坐おおあぐらで控おさえたのは、何と、鳴子なるこの渡わたを仁王におう立たちで越こした

拔ば群ぐんなその親仁おやしで。

恍惚うつつとりした小児こどもの顔を見ると、過日いつかの四季はなぞめの花染あわせの衿あを、ひたりと目の前へ投よこげて寄越よこして、大口おおぐちを開あいて笑わらった。

や、二人とも気に入いった、坊主ぼうずは児こになれ、女はその母おつかになれ、そして何時いつまでも娑婆しやばへ帰かえるな、と言いったんです。

娘むすめは乱みだれ髪がみになつて、その花を持もつたまま、膝ひざに手を置おいて、首うなだ垂たれて黙もくつていた。その返事こたへを聞きく手段しゅげんであつたと見みえて、私わたしは二晩ふたばん、土間どまの上うへへ、可恐おそろしい高い屋根裏やねうらに釣つるつた、駕籠かごの中なかへ入いれて釣つるされたんです。紙しに乗のせて、握にぎり飯めしを突つ込んでくれたけれど、それが食くべられるもんですか。

垂たれから透すかして、土間どまへ焚火たきびをしたのに雪ゆきのような顔かほを照あらさるられて、娘むすめが縛ばられていたのを見みましたが、それなり目めが眩くらんでしま

つたです。どんと駕籠が土間に下りた時、中から五、六疋鼠がち  
よろちよると駈出したが、代に娘が入つて来ました。

薫のかおり高い葉を噛んで口移しに含められて、膝に抱かれたから、  
一生懸命にしつかま繋り着くと、背中へ廻つた手が空を撫でるようで、  
娘は空蟬の殻かうつせみと見えて、唯た二晩がほどに、糸のように瘠せ  
たです。

もうお目に懸かられぬ、あの花染のお小袖は記念に私に下さい  
まし。しかし義理がありますから、必ずこんな処ところに隠家かくれががある  
と、町へ帰つても言うのではありません、と蒼白い顔して言い聞  
かす中に、駕籠が昇かかれて、うとうとと十四、五町ちよう。

奥様、此処ここまで、と声がして、駕籠が下りると、一人手を取つ

て私を外へ出しました。

左 ひだりみぎ 右 どげぎ に土下座して、手を支ついていた中に馬士まごもいた。一人

が背中に私を負おぶうと、娘は駕籠から出て見送ったが、顔に袖そでを当てて、長柄ながえにはツと泣伏なきふしました。それツきり。」

高坂は声も曇くもつて、

「私おふを負おぶつた男は、村を離れ、川を越して、遙はるかに鈴見すずみの橋たもとの袂たもとに差置さしおいて帰りましたが、この男は唾おとしと見えて、長い途みちに一言も物を言やしません。

私は死んだ者が蘇よみがえ生なまつたようになつて、家うちへ帰りましたが、

丁度ちようど全まる三みつ月つき経たつたです。

花を枕まくら頭かぶに差置さしおくと、その時も絶え入いつていた母は、呼吸いき

を返して、それから日増ひましに快よくなつて、五年経つてから亡なくなり  
 ました。魔まかくし隠こどもに逢あつた小児こどもが帰かへつた喜びのために、一旦いったんほんぷ本  
 復くをしたのだという人もありますが、私は、その娘の取とつてく  
 れた薬草くどくの功德くどくだと思おもうです。

それにつけても、恩人おんじんは、と思おもう。娘は山賊さんぞくに捕とらわれた事を、  
 小児心こどもごころにも知しつていたけれども、堅かたく言い付いけられて帰かへつたから、  
 その頃ころ三ヶ国さんこく横おうこ行こうの大賊たいぞくが、つい私わたしどもの隣となりの家うちへ入いつた時  
 も、何なんも言いわなないで黙もくつていまいました。

けれども、それから足あしが附ついて、二ふた一また俣またの奥おく、戸室とむろの麓ふもと、岩いわで  
 城しろを築ついた山寺さんじに、兇きようぞく賊ぞく籠こもると知しれて、まだ邏卒らそつといいつた時  
 分ぶん、捕方とりかたが多人数たにんず、隠家かくれがを取とり巻まいた時、表門まへかどの真只中まっただなかへ、

その親仁おやしだと言います、六尺一つの丸裸まるはだか体、脚絆きゃはんを堅きく、草鞋らじを引ひく《ひきし》め、背中へ十文字じゅうもんじに引背負ひつしよつた、四季の花はなぞ染めの熨斗目のしめの紋着もんつき、振袖ふりそでが颯さつと山やま嵐おろしに纏もつれる中に、女の黒髪くろかみがはらはらと零こぼれていた。

手に一ひとすじ条大身おおみの槍やりを提ひつさげて、背負しよつた女房にようばうが死骸しかいでなくば、

死人しにんの山やまを築きずくはず、無理むりに手活ていけの花はなにした、申もうしわけ 訳とむらいの葬むらいに、

医王山いおうざんの美女みよめヶ原がはら、花はなの中に埋うづめて帰かへる。汝うぬら見送みおくつても命いのちがな

いぞと、近寄ちかよつたのを五ご、六人むにん、蹴散くちらして、ぱつと退ひく中ちゆうを、

衝つと抜ひけると、岩いを飛とび、岩いを飛とび、岩いを飛とんで、やがて槍やりを杖つゑ

いて岩角いわかどに隠かくれて、それなりけりというので、さてはと、それ

からは私わたしがその娘むすめに出逢いう門出かどでだった誕生日たんじゆうびに、鈴見すずみの橋はしの上うへま

で来ては、こちらを拜んで帰り帰りましたが、母が亡なくなりまし  
た翌年から、東京へ修行に参つて、国へ歸つたのは漸やっと昨年。始  
終望んでいましたこの山へ、後あとを尋ねて上のぼる事が、物に取とりまぎ紛れ  
ている中うちに、申もうしわけ 訳もない飛んだ身勝手な。

またその薬を頂かねばならないようになったです。以前はそれ  
がために類たぐいすくな 少すくない女を一人、犠いけにえにしたくらいですから、今度は  
自分がどんな辛しんく苦も決して厭いとわない。いかにもしてその花が欲し  
いですが。」

言う中うちに胸が迫つて、涙を湛たえたためばかりでない。ふと、心こ  
ころづ付くと消えたように女の姿が見えないのは、草が深くなつた所せ  
為いであつた。

丈たけより高い茅萱ちがやを潜くぐつて、肩かきわで搔かきわ分け、頭つむりで避よけつつ、見えな  
い人ひとに、物言かい懸かける術すべもないので、高坂たかさかは御経おきようを取とつて押おし  
戴ただき、

山川さんせんけんこく 幽邃ゆうすいしよしよ所生う 卉木きぼくやくそう 藥艸やくそう 大小だいしようし

諸樹よじゆ

百穀ひやくこく 苗稼びょうが 甘蔗かんしよぶどう 葡萄ぶどう 雨之うししよじゆん 所潤じゆん 無不むふぶ 豊ぶ

足そく

乾地かんちぶごう 普洽ふく 藥木やくぼく 並茂びやうも 其雲ごうんしよしゆつ 所出しゆつ 一味いちみし 之し

水すい

葎むぐらの中に日ひが射さして、  
経きよう卷かんに、蒼あざく月つきかと思おもう草くさの影かげが映うつ  
つたが、見みつつ進すすむ内に、ちらちらと紅くれない来きたり、黄ききた来きたり、紫むらさき去さり、



しろす  
白過ぎて、蝶の戯るる風情して、偈に斑々と印したのは、はや  
さきまじ  
咲交る四季の花。

こつねん  
忽然として天開け、身は雲に包まれて、妙なる薰袖を蔽い、  
うずたか  
唯見ると堆き雪の如く、真白き中に紅ちらめき、瞶むる瞳に緑映  
と  
じて、颯と分れて、一つ一つ、花片となり、葉となつて、美女ケ  
さつ

たもとにお  
原の花は高坂の袂に匂ひ、胸に咲いた。

はなうり  
花売は籠を下して、立休ろうていた。笠を脱いで、襟脚  
かご  
おろ

たまた  
長く玉を伸べて、瑩沢なる黒髪を高く結んだのに、何時の間に  
ちいさ  
か一輪の小さな花を簪していた、棲はずれ、袂の端、大輪の菊の  
つま  
たもと  
たいりん  
色白き中に佇んで、高坂を待つて、莞爾と笑む、美しく気高き面  
たたず  
にっこ  
え  
おも  
ざし、威ある瞳に屹と射られて、今物語った人とも覚えす、はつ

と思うと学生は、既に身を忘れ、名を忘れて、唯ただこの九ツばかりの稚お児さなごになつた思ひであつた。

「さあ、お話まぎに紛れて遅く来ましたから、もうお月様が見えましよう。それまでにどうぞ手伝つて花籠つに摘んで下さいまし。」

と男を頼るように言われたけれども、高坂はかえつて唯々いいいとして、あたかも神に事つかうるが如く、左に菊を折り、右に牡丹ぼたんを折り、前に桔梗ききようを摘み、後うしろに朝顔を手繰たぐつて、再び、鈴見すずみの橋、鳴子なるこの渡わた、暁あけの夕立、黒婆くろばばの生豆腐なまどうふ、白姥しろうばの焼茄子やきなすび、牛うし車まの天女てんじよ、湯宿ゆやどの月、山路やまじの利鎌とがま、賊すみかの住家すま、戸室とむろぐち口の別わかれれ繰返して語りつつ、やがて一巡した時、花籠は美しく満たされたのである。

すると籠は、花ながら花の中に埋もれて消えた。

月影が射したから、伏拝ふしおがんで、心を籠めて、透かし透かし見  
たけれども、みまわしたけれども、見遣みやつたけれども、ものの薰かおりに形  
あつて仄ほのなまぼろしに幻かと思ゆるばかり、雲も雪も紫も偏ひとえに夜の色に紛まぎ  
るのみ。

殆ど絶望して倒れようとした時、思い懸がけず見ると、肩を並べ  
て齊ひとしく手を合せてすらりと立った、その黒髪の花唯ただ一輪、紅くれないな  
りけり月の光に。

高坂がその足許あしもとに平伏ひれふしたのは言うまでもなかった。

その時肩を落して、美女たおやめが手を取ると、取られて膝をずらして  
縫すがりつ着りついて、その帯のあたりに面おもてを上げたのを、月を浴びて藤長ろうた

けた、優しい顔で熟じつと見て、少し頬ほを傾けると、髪がそちらへは  
 らはらとなるのを、密そと押える手に、簪かざしを抜いて、戦わなく医学生なの  
 襟えりに挟はさんで、恍惚うっとりしたが、瞳ひとみが動き、

「ああ、お可なつかし懐い。思うお方かたの御病気はきつとそれで治なおります  
 。

あわれ、高坂しつかが緊乎とと留めた手は徒いたずらに茎つかを掴んで、袂たもとは空に、  
 美女さきみケ原は咲満さきみちたまま、ゆらゆらと前へ出たように覚えて、人  
 の姿は遠とほくなつた。

立つて追おうとすると、岩ぼたんに牡丹さきかさなの咲重あざやかつて、白ぞうおおいき象あざやかの大  
 なる頭かしらの如いたき頂たきへ、雲いに入るよう衝つと立つた時、一度その鮮あざやか明あざやか  
 な眉まゆが見えたが、月に風なき野となんぬ。

高坂はどうと坐した。

かくて胸なる紅くれないの一輪しおりを葉かたわらに、傍しやくやくの芍薬やくやくの花、方ほう一尺なる  
に経きようを据すえて、合がつしやう掌しようして、薬王品やくおうほんを夜もすがら。



## 青空文庫情報

底本：「鏡花短篇集」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年9月16日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第七卷」岩波書店

1942（昭和17）年7月初版発行

初出：「二六新報」

1903年（明治36年）5月16～30日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：砂場清隆

校正：門田裕志

2001年12月22日公開

2005年12月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 薬草取

## 泉鏡花

2020年 7月13日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>